

されどわれらが日々

—— 映画文学人生論

原作：柴田翔 (19065) 「文藝春秋」
監督：森谷司郎 『「されどわれらが日々」より別れの詩』
(1967) 脚本：橋本忍 岡田正代 橋本綾
出演：斎藤康子 (佐伯節子) 小川知子
山口伸夫 (大橋文夫) 山口崇
参考：『日本の夜と霧』 (1960) 監督：大島渚

私たちの世代は、

きつと老いやすい世代だ

『されどわれらが日々』は安保世代、つまり日米安保条約改定の反対闘争に挫折した世代のバイブルといわれた時期がある。私もその世代の一人なので、いちど読んだことがあるが、「私たちの世代は、きつと老いやすい世代なのだ」という主人公のセリフ以外はほとんど記憶にない。

このセリフを覚えているのは、なぜか、その通りだと共感したためだと思う。しかし、私の場合は、なにも安保闘争に挫折したわけではない。

それから五十年近い歳月が流れた。今や長生きしすぎてすみませんという心境だが、それはともかくとして、あの安保闘争は何だったのだろう。一度しかデモに参加したことがない私には条約の中味が何もわかっていなかった。おそまきながら真相を理解したいと、森谷司郎監督の映画のDVDを探したが、見つからない。

原作を読み直してみると、意外にもこの小説は安保世代の挫折をテーマにしたものではないことがわかった。むしろ、その一昔前、昭和二十七年の破防法闘争世代の挫折を描いている。彼らは武装闘争による革命を目指し、共産党の指示によって地下に潜った。

ところが、第六回全国協議会（六全協議、昭和三十年）で党が武装闘争路線の放棄を決議し、学生たちははしごをはずされた。これが彼らの挫折



されどわれらが日々

映画文学人生論

ある。安保の挫折よりも深刻で、自殺者も出た。

ただし、この小説の主人公大橋文夫は政治的にはノンポリで、破防法党争にも武装革命路線の運動にもかかわっていない。彼の望みはいずれ大学の語学教師になって、一冊位訳書を出すことだ。

文夫が挫折を経験したとすれば、婚約者の佐伯節子に逃げられたこと位か。ただし、恋に挫折したかたちにはなっているが、よく読むと、その恋はあまり切実なものだったとは思えない。

文夫はどちらかといえば女にもてるタイプで、性的享樂の相手は過去に何人もいた。そのうちの梶井麗子は妊娠し、自殺をした後、手紙で妊娠の事実を彼に伝えた。文夫は衝撃を受けたが、そのために後追い自殺をすることはなかった。

彼は挫折という言葉は使っていない。彼がよく使う言葉は空虚である。恋にも革命にも熱中することはなく、深刻な挫折もしない人生を空虚という言葉で飾る。その反面、語学教師になって訳書を出す自分の未来に希望を抱き、満足している。

関連映画は大島渚監督の『日本の夜と霧』を観た。破防法挫折世代の新聞記者と安保挫折世代の新婦との結婚披露宴で、出席者が過去の闘争の反省、相互批判、暴露、責任追及をする——昭和三十五年の公開だが、四日後、自主的に上演を中止（大島渚は松竹を退社）している。

安保の忌されどわれらは空虚なり